

弥生時代のお墓 ―キビの特質―

草原孝典

【講座の概要】

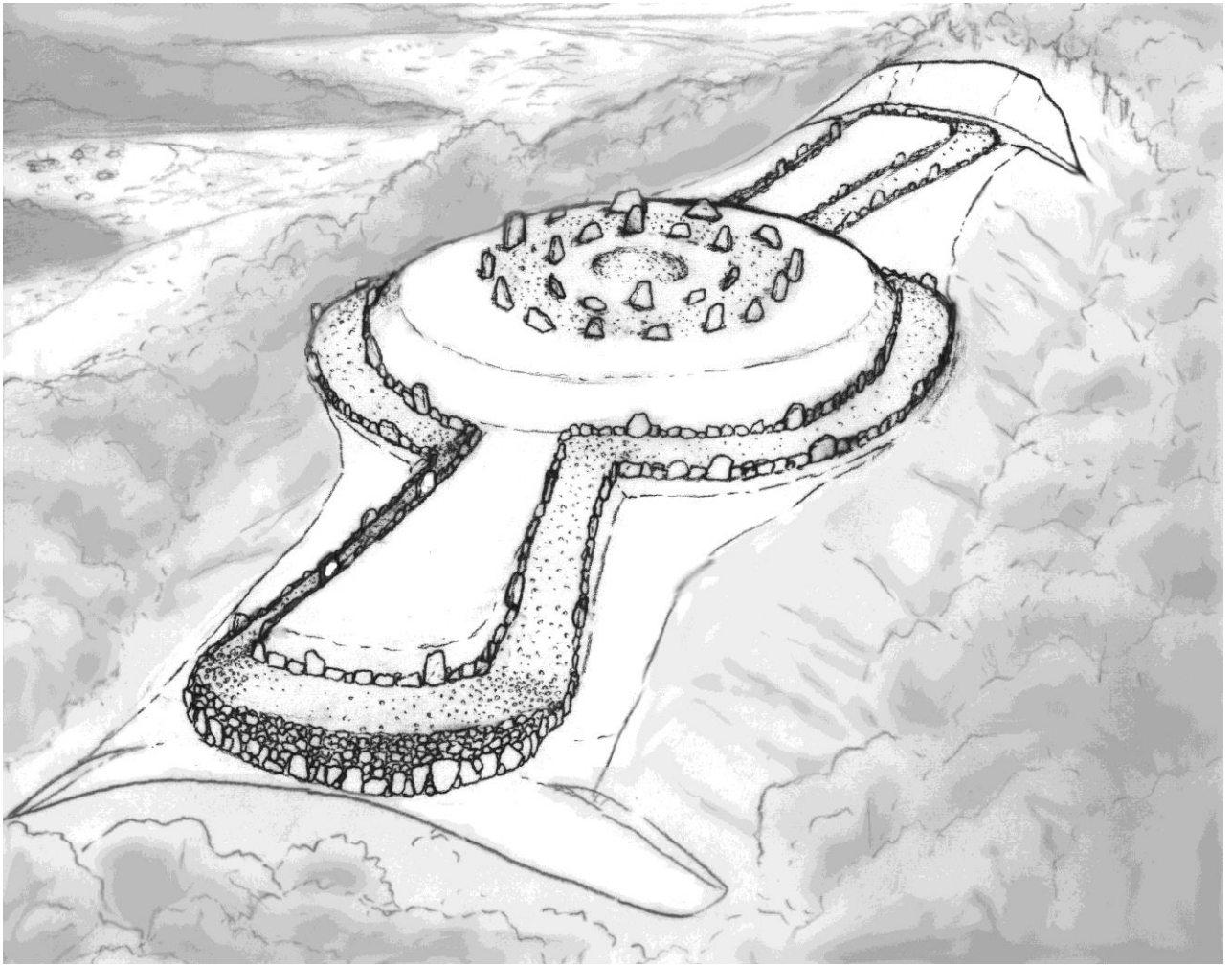
日本列島に稲作が伝播してからは、各地の平野を中心に集落が形成されるようになります。程度の差はあると思われませんが、基本的には稲作主体の社会になったと考えられます。そのため、定住化がすすみ、各地で小地域が形成されます。それは土器のカタチに反映されていますが、木器や石器にも認められます。さらにお墓にも認められます。大雑把にみると、北九州の甕棺墓、中四国地域の土坑墓、近畿や東日本の方形周溝墓で、ほかに再葬墓、石棺墓、方形台状墓、円形周溝墓なども認められます。それらは、各地の地域性も示しているとともに、集団内の立場の差や、王の有無なども反映しており、当時の社会を解明するための重要な資料となるため、古くから研究されてきました。

岡山県全域と広島県の東半は、律令制下の備前国、備中国、備後国、美作国に相当し、それらは大和王権に匹敵する勢力を持っていたと考えられている吉備を分割して成立したと考えられています。広大な範囲の吉備が、常に一体であったことを示す考古学的な資料は少ないことから、ここではその範囲をキビと片仮名表記で示すことにします。キビ地域の弥生時代のお墓は、弥生前期から中期初頭に円形周溝墓が認められ、そこには木棺が1基だけ認める場合があります、特定個人墓の性格がうかがわれます。ところが、その後は特定個人墓が認められなくなり、土坑墓や木棺墓がまとまる集団墓のみとなります。そして再び出現する特定個人墓は弥生後期の巨大な墳丘をもつ首長墓で、古墳時代の前方後円墳へ続くものと考えられています。

今回の講座では、なぜキビに古墳時代へと続く首長墓が出現したのかを、青銅器祭祀や弥生後期の流通構造の変革と関係づけながら説明していきたいと思えます。

【参考文献】

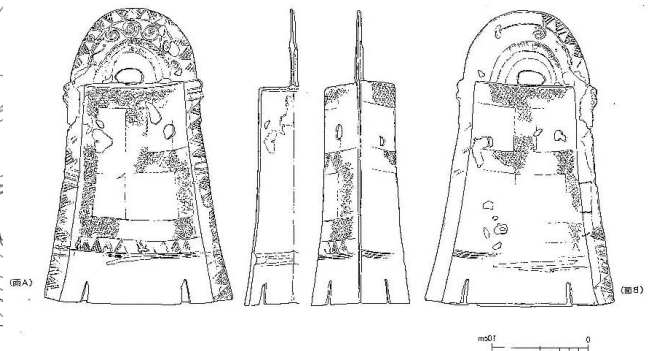
- 近藤義郎・河本清編1987『吉備の考古学―吉備世界の盛衰を追う―』(株)福武書店
稲田孝司・八木充編1992『新装古代の日本 第四巻中国・四国』(株)角川書店
門脇禎二・狩野久・葛原克人2005『古代を考える 吉備』吉川弘文館



楯築墳丘墓の復元図

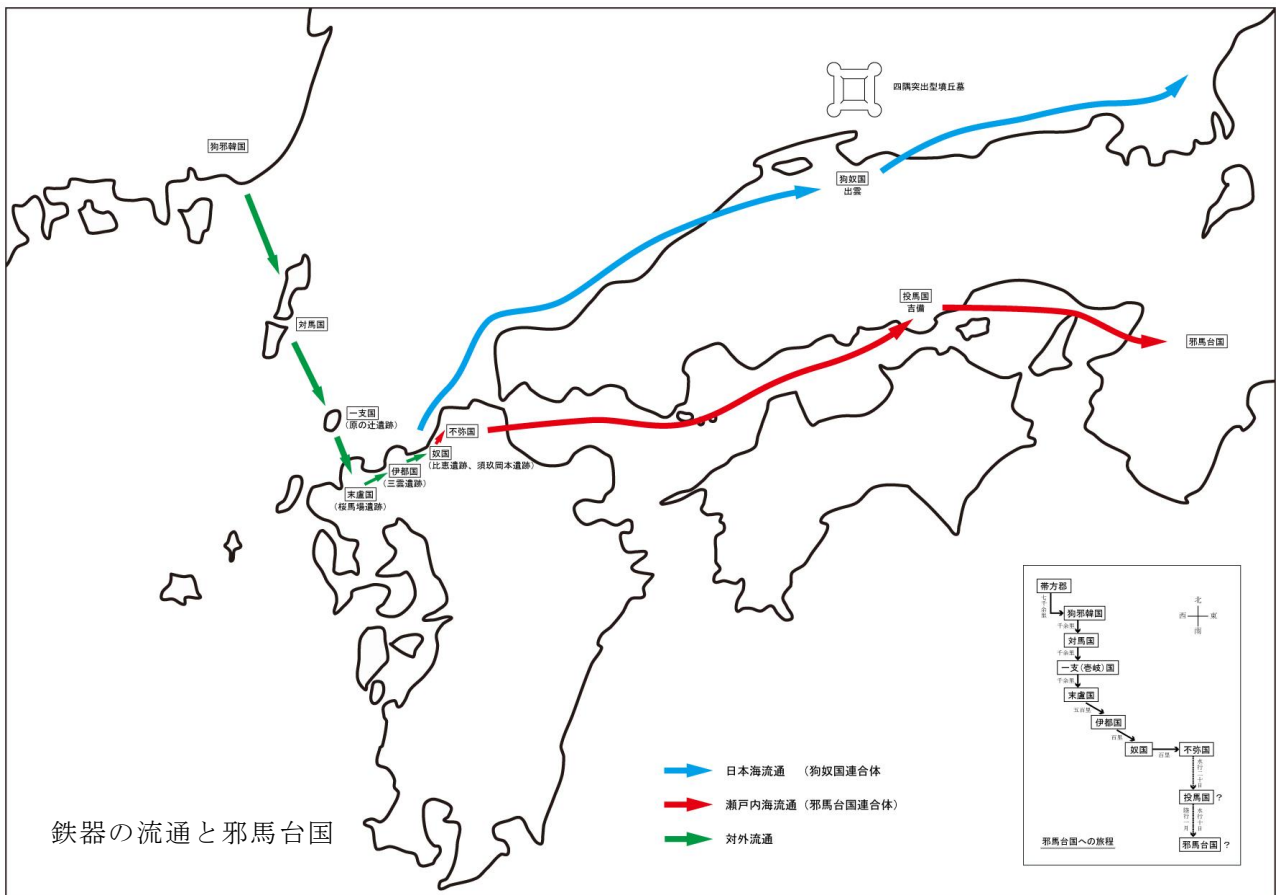
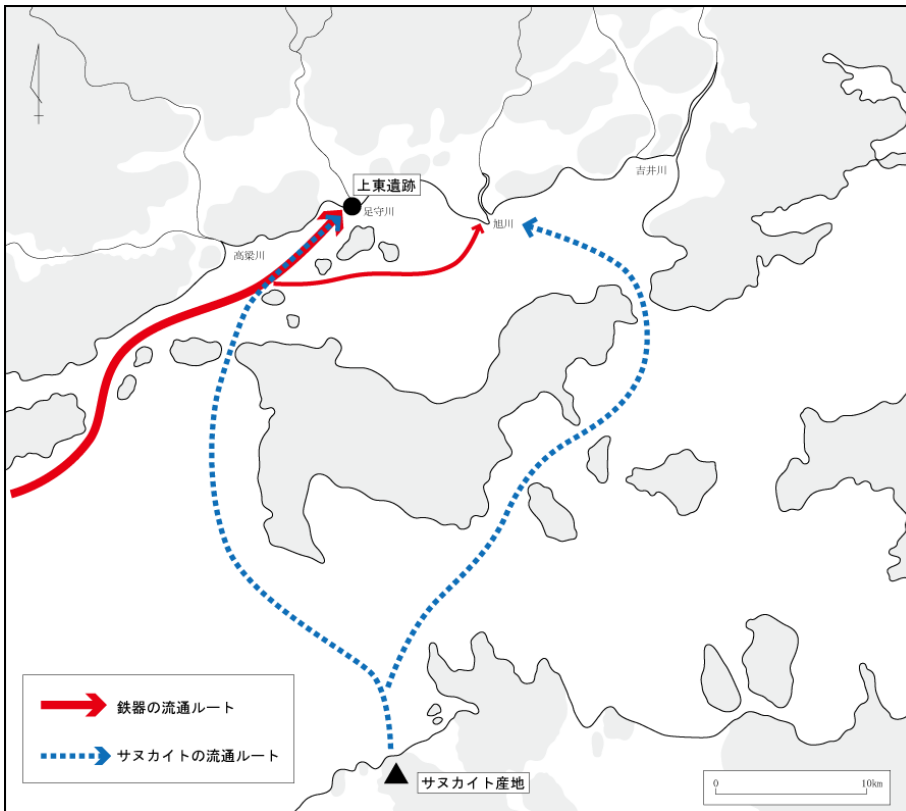


みそのお遺跡の木棺墓



伝安仁神社裏山出土銅鐸

石器と鉄器の流通



鉄器の流通と邪馬台国